

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2818 号

A Study of Cancer-Related-Fatigue in Patients Undergoing Postoperative Adjuvant Chemotherapy for Breast Cancer

乳がん術後補助化学療法実施患者を対象とした Cancer-Related-Fatigue に関する研究

齊藤 有希 (さいとう うき)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、現在がん関連の主要学会でガイドラインがなく、評価方法や治療方法が確立していない、がん治療に起因する倦怠感 (Cancer-Related-Fatigue (CRF)) の発生状況の経時的変化を調査した。身体的倦怠感・総合的倦怠感は有意に化学療法実施中増加し、終了後減少した。精神的倦怠感は有意に化学療法中緩やかに減少し、化学療法終了後さらに減少した。正しい情報発信により、患者の治療意欲の後押しに繋げることを目指す。

【新規性、創造性】 抗がん剤治療実施中の CRF の発現を経時的に調査した点、倦怠感に関する文化的な影響に配慮して開発時に日本人を対象にして作成した調査票である CFS を使用した点、治療レジメンを現在の標準療法に設定した点に本研究の新規性・創造性がある。

【方法・研究倫理】 乳がん術後補助化学療法を実施する患者 20 名を対象にアンケート調査を実施した。調査は治療実施直前、継続中、終了後に行い、2 種類の調査票が用いられた; CFS (CRF 評価票)、HADS (不安抑うつ評価票)。研究は順天堂大学の倫理委員会で承認を得て、人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針およびヘルシンキ宣言に従って実施した。

【学術的意義】 CRF は、がんの主要学会でのガイドラインがなく、確立した評価方法、治療方法がなく、患者の 60-90% に発生し長期にわたり強い倦怠感に苦しむ患者がいるにも関わらず患者に説明できる情報が乏しい。そのような CRF について、現在の乳がん術後補助化学療法の標準療法について経時的変化の情報となり得る。

【考察・今後の発展】 本研究は化学療法実施中は CRF は増悪し、終了後回復すると仮説を立てた。結果は仮説の通りの部分もあったが、カテゴリー別に異なった。認知的倦怠感は化学療法終了後 3 カ月が経過してから増加していることから、倦怠感の直接の原因が化学療法とは限らないことを示唆している。本研究に限界点はあるが、実臨床のニーズに応えていく第一歩である。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。